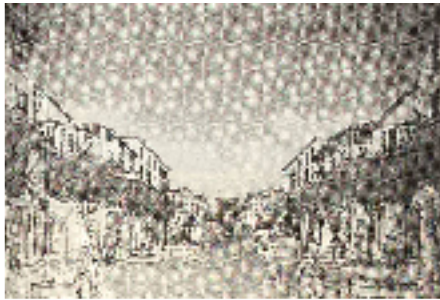


ネオ・アーバニズム



出典：サステイナブル・コミュニティ(学芸出版社)

■ネオアーバニズムの特徴

- ① ウォークアビリティ (回遊性)
まちの中心から端まで 10 分程度で歩けるサイズ、歩行者中心の街
- ② ミックスドユーズ (用途の複合化)
単一の土地利用ではなく、商業施設や住宅、オフィスバランスよく配置
- ③ 多様な居住形態の提供
いろいろな人が街に住めるように
- ④ 高密度・コンパクト設計
コミュニティを一番のセールスポイントに



出典：群馬大学工学部 web

このような理想都市を実現できるコンパクトな都市はあまりありませんし、だいたい都市計画用途地域でがんじがらめになっています
その点、桐生はどうでしょう。中心市街地には準工業地域が大部分を占め、非常に自由な土地利用が可能となっています。
また群馬大学工学部の存在もアドバンテージを握っていると言えます。

このような理想都市の中でのAさんの生活を紹介します。・・・
Aさんは服も家具も食器も自家用車も自分の小さな工場で作ります。家の1階の奥が工房になっているのです。食べ物も自分の畑で収穫します。自転車で10分程度の所にあります。

そして、たまに良いモノができたとき、町の人にも分けてあげたいと思って自分の小さな店に出します。たまに売れて、そのお金を貯めて、次の制作の材料費に充てます。

良いモノができたときはとても気分が良くなります。でも、つくりすぎて溜まってしまうこともあります。心配ありません。契約している空き倉庫(ギャラリー)がたくさんあります。しばらくそこに置かせてもらって作品として町の人に見て楽しんでもらいます。

そうしたちょっとしたお宝を求めて、ときどき遠くから買い物客や観光客が訪れます。そうしたとき、Aさんは来賓として温かく迎え入れ、家に泊めてあげます。自宅2階の奥はいわばプチホテルになっているのです。

こうして、この町は住・商・工・農が混在した、歩いて、住んで楽しい町になっているのです。

美術・工芸運動



2006年 調布市にて 新井淳一展

■日本では

日本においても、城郭、寺社、庭園などに風景というものがありました。人間の技芸の高さというものは、総じて我々に対して崇高な価値観の源泉となっていたのです。

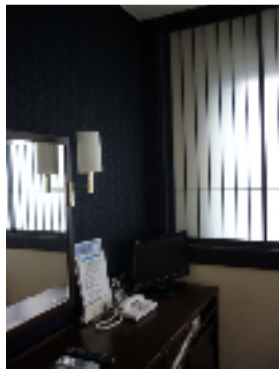
職人の技芸が完膚無く打ち砕かれてしまったのは戦後のモダニズム運動の余波の中です。似非モダニズムの横行により、技芸を感じさせるようなものは窓枠や壁面、室内のカーテンや家具のみならず、衣服や食器といった生活に係わるありとあらゆるものから去ってしまいました。

【桐生での具体的な運動へ】

我々は、地場のテキスタイルデザイナーやインテリアデザイナーと組んで、日本のウィリアム・モーリスをプロデュースしたいと考えております。

まずは桐生市内のいくつかの店舗やホテルに使っていただくことと考えております。

巴町にあるショコラノアの客室とキッチンとの間にある暖簾、中庭に面した廊下側のシェード、トイレのシェード、奥の洋間のカーテン、及びエースホテル708号室の壁紙、カーテン、ベッドカバー、ファブリックは、我々の作品です。



日本の造園には「縮景」という考え方があります。日本庭園とは、ある世界観を凝縮して見せる風景で、例えば茶室の庭園は、客人が野を越え山を越え遠路はるばる訪ねて来る様子を凝縮して見せています。

この「縮景」という考え方の中に、日本人がそれまでの長い文化を通して継承してきた美的感覚を抽象化し純化しようという一つの方向性が横たわっているのにお気づきでしょうか。

日本人を取り巻く山河の風景、四季の風土のなかで、しみじみ心を打たれるような要素を縮小化、抽象化もしくは純化して、日本庭園や茶室などに造形、比率、記号、作法などに表現してきたのです。

ここにモダニズムが本来目指そうとしていたものの一つの解を与えてくれることに気がつかねばなりません。

そこで、私たちは、この時代の日本にあって庶民が少しでも技芸による精神的感動を得られるようなデザインを「縮景」として生活の中に取り入れていけないか、その可能性を再度模索しながら普及しようと考えています。

すなわち、和洋を問わず文化に触れて生きている同時代の日本人にとって、無意識に文化的懐古的感動を呼び起こすような造形、比率、記号、作法を「縮景」として表現したデザインを迫ることです。

【理想とする都市】

近代的な都市計画は、英国型、米国型いずれにしても土地利用を規制する都市計画であり、用途を区分するものでした。

それらの思想を輸入した日本の都市計画も、商業地域、工業地域、住宅地域、農業地域と区分して混ざり合わないようにするものでした。

その結果として、住宅地と商業地が離れ、お年寄りが買い物に行けないといった矛盾や、町工場が農家が住宅地から閉め出されるといった矛盾が起きてしまいました。

そこで、用途を混在させて、住宅地の中に商業も工業も農業も小規模に点在させて、歩行10分圏の中にすべてのサービスを満足させるような自立的な「ピース」をモザイクのように貼り合わせたような新しい都市計画「ネオ・アーバニズム」が20世紀後半に米国で誕生しました。

自分の住まいやその近くに、工場や商店や農地があって、自分で「ものづくり」ができる都市です。

近代的な労働は、永遠に自立できない(=疎外された)「個人」を創り出し、19世紀以降、多くの学者が「職」や「労働」を、住まいの近くに置こうとする様々なアイデアを打ち出しました。

しかしながら、それらを実現するためには、都市が住宅地と工業地、商業地、農業地を分けていたのでは始まりません。

そこで、現代の都市計画家たちは、上記のようなモザイク型都市でなくてはならないだろうと考えているのです。

【美術・工芸運動とは】

かつて西欧には、建築とは人間の技芸の集大成であると思われていた時代がありました。職人の手業を見せつけるかのごとく手の込んだ意匠に装われた建築物と、それを要素とした都市の街並みというものがありません。

しかしながら、産業革命以降、技芸に代わって技術が台頭し、建築の分野もその波に飲み込まれることになりました。

その行き着く先には、それまで職人にとって醍醐味であった窓枠や壁面や室内装飾の多角的な装飾が、極端になくなり、四角四面の簡素な空間にすべてが集約されていったのです。

モダニズム運動も、本来は精神的感動を高次に抽象化して新たな価値観に導こうとしたものでしたが、あまりに特化しすぎて人の理解から遠ざかってしまい、その結果として似非モダニズムをはびこらせてしまいました。

そして安易な脱装飾主義を生み出し、そこから多くの美的なモノがそぎ落とされていったのです。

一方で、近代から現代にかけて、テキスタイルの世界でもそうした懐古的感動を衝動させるような装飾の継承の必要性に気づき始めていました。

そのことに19世紀に気づき、英国で美術工芸運動を始めたのがウィリアム・モーリスです。彼はカーテンや室内装飾など生活の中でのデザインに着目して美術工芸運動を始めました。